

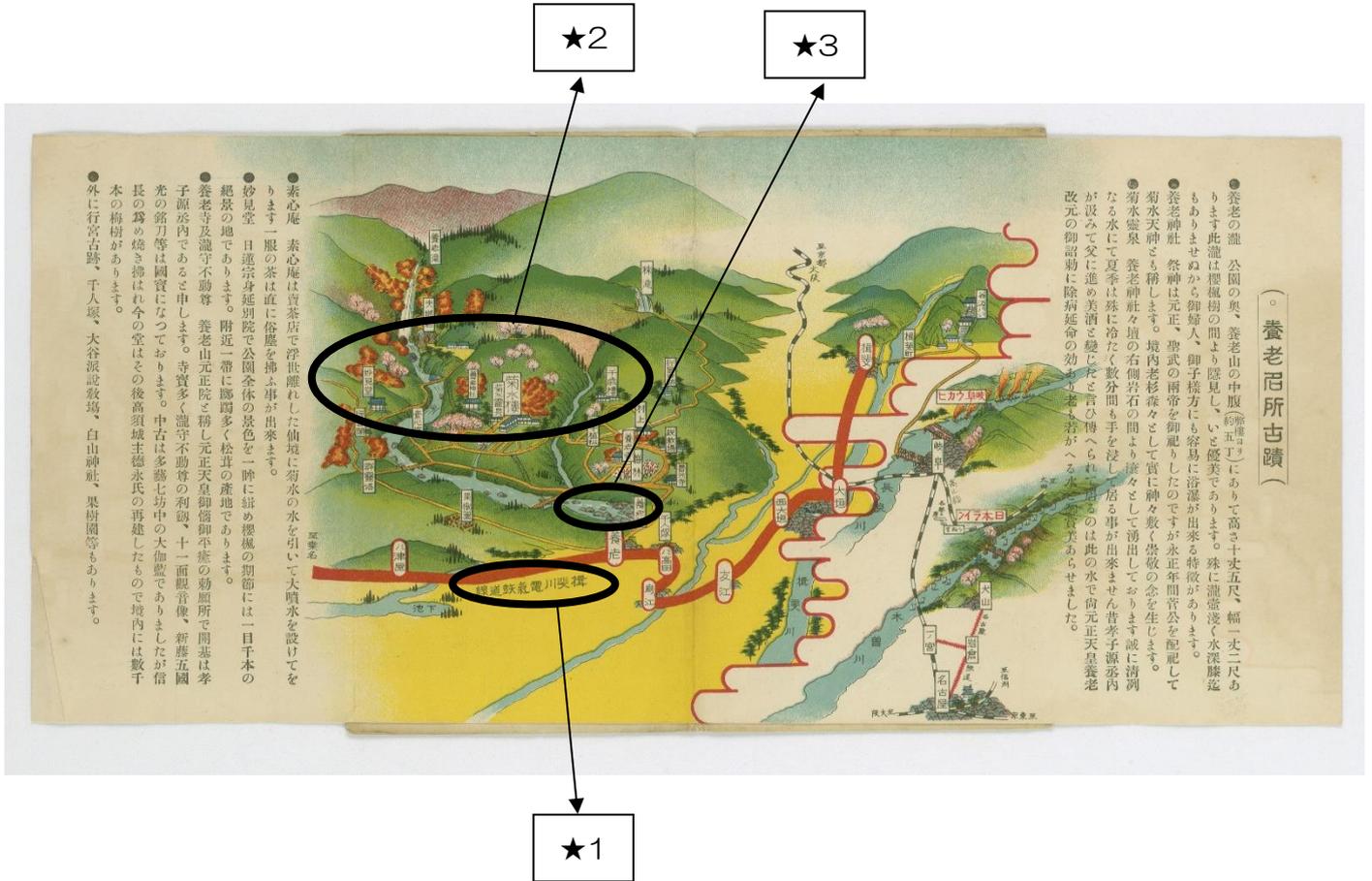
授業で使える当館所蔵地図

No. 81 『(外) 養老公園名所案内』

作成年：不詳

サイズ：16×35cm

作者：菊水旅館発行



【解説】

養老公園は、孝子伝説のある養老の滝を中心として明治13（1880）10月に開設された後、観光客向けの施設が多く設置された。本図はその施設の案内となっている。また、図中の標題は「養老名所古蹟」となっているが、岐阜の鶉飼や日本ラインにも触れられており、鉄道を使用した観光を想定して広く沿線を紹介しようという意図がうかがえる。

★1 揖斐川電気鉄道

初代の養老鉄道は、経費削減のため1922（大正11）年に揖斐川電気に合併し、揖斐川電気鉄道部になった。翌年には全線電化し、鉄道利用者数、貨物輸送量ともに大幅に増加したため、長らく山間僻地の景勝と埋もれてきた養老が全国的に有名になり、観光客が大幅に増えることになった。しかし、揖斐川電気は鉄道電化への投資が大きな負担となり、1928（昭和3）年に設立された「養老電気鉄道」に事業が譲渡される。したがって、「揖斐川電気鉄道」と表記されている本図は大正末期のものであると考えられる。なお、その後も養老鉄道は伊勢電鉄や参宮急鉄、近畿日本鉄道など様々な会社を転々とし、現在の養老鉄道株式会社による運営は2007（平成19）年からである。

★2 様々な寺院などの施設

1880(明治13)年に公園が開設された後、公園のさらなる発展をはかるために宗教施設を誘致すると、県令小崎の指導により、養老説教場や妙見堂などが整備された。そもそも養老公園は、明治維新後に荒廃しつつある社寺境内や名勝旧跡を保存しようと、明治6年(1873)に発布された太政官布告に基づきいわゆる「太政官公園」(「上野公園」や「奈良公園」と同類)であり、地元の大きな期待を背負った公園でもあった。そのため、宗教施設に限らず、この地囃には出てきていないが駅前から公園にかけて土産物屋や飲食店、菓子屋、人力駐車場、運送店などが並び、公園案内看板のほか、駅前に蒸気機関車のための給水設備を利用して噴水池も整備されるなど、街を挙げて養老公園を軸とした観光に力を入れていたことがうかがえる。

★3 途中で消える河川

濃尾平野西端に位置する養老山地は、濃尾傾動運動によって山地の東側が隆起を続けている。すなわち傾動地塊となっており、その影響で山地の東側(養老側)が急傾斜の断層崖、西側(員弁側)が緩斜面となっている。そのため、養老側の斜面は崩壊が進みやすくなっており、全国でも有数の扇状地地帯となっている。扇状地では、扇央で川が伏流することが多く、この囃でも養老の滝から下るにつれて、川底の岩が露出し水が少なくなっていく様子が読み取れる。

【用語について】

・養老の滝／孝子伝説

以下が、養老の滝に伝わる伝説である。

「むかし、源丞内という貧しい若者が山奥を歩いていると、岩肌を流れ落ちる水に混じってから酒の香りがする。不思議に思い辺りを探したところ、酒の味がする山吹色の水が湧き出ていた。これを汲んで帰り、年老いた父に飲ませたところ、大変喜びすっかり若々しくなったという。この話は都まで伝わり、当時の女帝であった元正天皇が霊亀3(717)年に当地に行幸し、この湧水を飲浴した。すると「肌は滑らかになり、痛みも無くなった。また、この水を飲むたり浴びたりすると白髪が黒くなり、髪が生え、目が見えるようになり、病氣も治ったという。これは天からの恵みに違いない。」と仰せられ、同年に元号を「養老」へ改元した。

【利用の例】

○高等学校 地理A・Bおよび地理総合における「河川の地形」で使用できる。

→★3の説明の通り、扇状地における伏流の説明に使用できる。

→扇状地が多い分、扇端の湧水地も多いことから、「養老サイダー」などの水を利用した名産品との関連も想起できる。

○高等学校 日本史B「明治維新」での鉄道の普及のようすを知ることができる。

→鉄道開通初期における、日本人の鉄道に対する期待がこのような観光案内図からうかがうことができる。

○「地域おこし」の歴史的な例として使用できる。

→中学校の公民、高校の現代社会や公共、総合的な探究の時間などでは、地方創生を取り上げられることが多くなっている。この養老公園の例は、行政と民間が協力して観光地化を目指しており、現在の第3セクターによる運営などにも通じるところがある。また、現在の養老町は観光客および定住人口の減少に悩まされており、過去と現在を比較してその原因を考察することにも利用できる。